



第 129 号

石田 郁雄
KCCN 副理事長
司法書士

一人でも困らない社会づくり

KCCN ニュース 115 号 (2024 年 1 月) で私の母が認知症になり、施設に入所した話を書きました。今回はその続きです。

母が施設に入所してから一年が経ちました。母は、家で体が動かさなくなり、救急車で病院に運ばれて、そこで2か月間リハビリ訓練を受けた後、グループホームへ入所しました。病院からはいくつかのグループホームの紹介があり、最初に教えていただいたのは京都市の中心部にあるグループホームでした。見学に行くと、街中のせいどころなくせわしい感じがあり、クルマの騒音も大きそうなため断りました。入所を決めたグループホームは京都市内ではあるものの、人里離れた場所にあり、周囲には山や田畑があるようなのんびりした土地でした。母は田舎生まれであり、このような自然の豊かな場所で生活できることを好むだろうと考え、そこに入所することにしました。

グループホームというのは入所者数人ごとに共同生活をするタイプの老人ホームです。入所者の能力に合わせ、食事の支度、洗濯物を畳むといった軽作業を行います。日常的な活動を行うことで生活能力の保持を行うわけです。また普段の生活として、花や野菜を育てたり、周辺を散歩（母の場合は車いすに乗ったまま）したり、ビデオを見ながらみんなで歌を歌ったり、パズルゲームなども行います。いずれも認知症の進行を抑える狙いがあります。

実際、母は家にいたときよりも明るく元気になりました。家にいたときは、私以外の誰に会うこともなく、体を動かすこともほとんどなく、食事をしてテレビを見て風呂に入って寝るような、何も変化のない毎日でした。私が外出しているときは家に一人きりになるので、非常に不安になるようでした。私の帰りが遅くなるようなときには、何回も私の携帯電話に電話をしてきたこともありました。

グループホームでは毎日、職員の方や入所者の方々たちと会って話をしますし、自宅にいるときに比べて、変化のある生活ができます。また毎日、体温と血圧を測定し、体調の変化を観察してくれますし、定期的に医師と歯科医師による検診もあります。少しでも病気の兆候があるとすぐに対応してもらうことができます。

自分のこととして置き換えてみると、生活するなら老後も、勝手に知った自宅で誰にも気

を遣わずに暮らしたいとは思いますが、反面、介護が必要になったり、体力、体調面での不安を考えると、世話をしてくれる専門の方々が周りにいる環境で生活することの必要性を感じるのです。

高齢になると、どう生きて行けばいいかを自分で判断することが難しくなります。多くの人は、普段当たりまえにできていたことが、できなくなっていくことを想像できないはずで、最近では、老後のことを事前に自分で準備する「終活」が話題になっていますが、自分で決めたことを実現するにも、誰かに頼る必要が出てきます。

どんな人間も一人では生きていけないものです。困ったことがあると他人に相談したり、力を貸してもらわなければならない時があります。特に高齢になり、体の自由や物事の判断がおぼつかなくなったときは、他人にお世話にならなければなりません。

現代は個人化が進み、おひとり様文化が流行る世の中ですが、そんな時代だからこそ、すべての個人が一人でも困らない、いざというときは誰かが必ず助けてくれる社会の構築が必要と思うのです。現在、行政や各種専門家がそれを担っているのですが、社会全体として支えるということは、他人に助けてもらうことに申し訳なさを感じることなく、誰もが安心感を共有できる社会づくりが、今後さらに求められてくるのではないのでしょうか。

(2025年3月)